

家族に心配されながらも 最後まで搜索を諦めなかった

福島県南相馬市消防団
小高区団 副団長

片岡 芳廣 (59歳)
消防団歴 27年 (会社役員)



南相馬市の概要と被害状況

南相馬市は福島県の太平洋側に位置し、平成18年1月1日、原町市と相馬郡小高町および鹿島町が合併して誕生した市である。行政区の小高区はその南相馬の南側に位置し、面積は91.95km²、人口1万2,163人（平成23年6月1日現在）で、阿武隈高地を町の西端とし、小高川が町を横切り太平洋へと流れている地域である。また、小高川の中流部には小高城址などがあり、周辺に区役所や駅、2つの実業高校などが集中する。

南相馬市消防団は小高区団（3分団26部）、鹿島区団（4分団28部+機動部2部）、原町区団（5分団36部+自動車部2部）、の3区分団に分かれていて、総勢1,334名が所属している。被雇用者（サラリーマン）は1,078名（約80%）と多い（平成23年4月1日現在）。

南相馬市は、東日本大震災により、死者631人、行方不明者7人、負傷者59人の人的被害、全壊5,432棟、半壊1,306棟、一部損壊2,232棟、床上浸水991棟、床下浸水308棟の住家被害に遭った。

振り子のように揺れる家

今もまだ福島第一原子力発電所の事故で苦しむ南相馬市。なかでも小高区全体は今も警戒区域に

指定され、全員が避難をしている。私はその小高区の消防団で副団長を務めている。

3月11日発災当時、私は海からすぐ近くの浪江町塩棚で、ある家の住宅設備工事を従業員たちと行っている最中だった。14時46分、大きな揺れが東日本を襲い、福島県にも震度6弱の地震が起こった。一瞬頭をよぎったのは2日前に起こった大きな地震だった。「また地震が来たんだ」と思い、一時作業を中断し揺れがおさまるのを待とうとした。しかし、普段の揺れなら5、6秒、長くても10秒ぐらいでおさまる揺れが一向におさまらず、1分が過ぎたところで立ち合っていた建て主さんと「これは、やばい！」「ここに居られる状況ではない」と判断し、2人で外に出ようとした。しかし、思いのほか揺れは激しく、2人が外に出ようとするのを阻むかのように容赦ない揺れが襲った。建て主さんと四つんばいになりながら、やっとのことで外に出た。外に出てからも瓦の落下に注意しながら激しく揺れる植木につかまり揺れがおさまるのを待った。周りの様子を見まわすと、周りの家の2階が振り子のように揺れ、道には瓦も降ってきていた。長い揺れがおさまると同時に、周りにあった2、3軒の家がまるで振り子のセットのようにバタ…バタっと次々と倒れ始めた。目の前に起こっていることが信じられずにいたが、消防団という職務柄、私はすかさず倒れた母屋に向かった。「だれかいなすか？」「いなすか？」と2、3軒の家を走り回り、声をかけ、家

の瓦礫の隙間から安否確認を行った。幸いお年寄りたちもみな大きな揺れにビックリし、外に飛び出していたため、そこでの犠牲者はいなかった。この時、南端の小高区と北端の鹿島区で、震度6弱の揺れが観測されていた。

作業をしていた家に戻ると、建て主さんが「これは津波が来るかもわかんない」と言ったが、この地域ではかつて大きな津波の災害はなかったため、せいぜい大きくても2、3mの津波で防波堤で止まるだろうと、思っていた。しかし建て主の方に再度「これはすぐ津波が来るかも知れないから片岡さんもすぐ退避したほうがいいよ」と言われ、残った仕事を片付け、15時過ぎに従業員と一緒にその場を撤収し、会社に戻ることにした。

迂回に迂回を重ねて会社に戻る

会社は小高区の福岡行政区で、作業をしていた現場からは車で20分くらいの所だった。街道を北上し帰る道すがら、ひび割れた道路状況を見てこれは尋常ではないと思った。ことの重大さに、他の現場の作業員にもすぐ撤収するように電話を入れたが、すでに電話は通じなくなっており、連絡の付けようもなかった。しばらく車を走らせていると配水場の所に警察官が2人立っていて「井田川の配水場に向かう道路が50cm下がっていて通行止めになっているため別のルートを行ってください」と言われた。やむを得ず、コースを変えて帰社することにした。ところが、各道路の舗装状態も地割れなどでかなりの段差ができていて車が思うように通れなく、迂回に迂回を重ね通常20分で行ける距離が相当な時間がかかった。ようやく戻ったのが15時30分過ぎだった。

津波から逃れ高台へ避難

やっとの思いで会社に戻り家の様子を確認していると、1台の消防自動車が「津波だ！すぐ逃げ



津波で被害にあった事務所

ろ！」と広報をしながら猛スピードで飛ばし目の前を通過して行った。自分でも一瞬「なに？」とその言葉に呆気に取られていたが、目を海のほうに向けると津波がすでに国道を越え会社の目の前まで来ていた！「これはいけない」と思い、先に家族を車に乗り込ませ急いで退避させた。そうこうしている間に津波は瓦礫と共に会社の10m手前まで来ていたため、自分も急いで高台に車で避難した。工場のある高台へ避難し、2波3波と来襲する津波がおさまるのを待ち続けた。その状況をなすすべもなく見守った。津波が、南相馬市の海岸線から約2km付近までの町を呑み込んだ。小高区塚原字沼在住の自然環境調査員の見聞証言によれば、特に津波の第3波は大きく、海岸線に設けられた高さ十数mの防潮林を越えたという。

津波がおさまったのを確認した私は、自転車を借り、避難していた高台から自分の会社に行ってみることにしたが、農道の半分まで来ると、海水は膝まで水没しているため自転車を使うことは出来ず、小高い所を探しながら徒歩で会社に戻った。会社はすでに1階のガレージ部分が破損され、従業員の車も流されており、この津波が尋常ではないことに私は茫然とした。会社に戻る道すがら偶然にも小高福岡行政区を管轄している東部地区の第3分団長と行きあい、すぐに区役所に行こうということになったが、行く前にこの状況を把握しようということになった。辺りはすっかり日が落ちていて薄暗くなっていた。

救助、捜索は夜通しで行われた

国道6号は大分水が引けていたため、私は第3

分団長とともに国道6号を北上し区役所に向かった。状況確認をしながら車を走らせたが、辺りは予想だにしない瓦礫の山が散乱し、言葉にならない状態だった。18時に区役所に到着した。区役所では災害対策本部が立ち上がり、打ち合わせがすでに始まっていた。自分も対策本部に入り、消防団の救助活動についての救助マップなどを作成し、消防団幹部で作戦をたてた。

辺りが暗くなってきたため、一人ひとりで探すのは困難とし、10名1組のグループで行動をすることにした。通信網が多少復旧し、区役所には救助を求める市民からの電話が入るようになった。消防団は救助要請が入った所を優先的に分隊で動き救助に向かった。水位は多少引いていたものの、海水で孤立したところが多く出たため、ゴムボートなどの用具が必要となった。消防団の備品にゴムボートはなかったが、団員が個人で所持しているゴムボートを使用した。暗い水のなかへとボートを曳き、懐中電灯で照らしながら進むため、瓦礫の破片や釘が剥き出しになっており、活動はかなりの危険が予測された。私は安全第一で務めるように団員たちに強く指示した。

捜索は夜通しで行われた。暗闇のなか、車のなかで人の気配はすれどもそこまで行くすべがなく、助けたくても助けられないジレンマがあった。今回の救助では、今までの訓練でありえなかった想定外の予測不能なことばかりが起こった。要救助者はご老人や身体の不自由な方が多く、救助活動は困難を極めた。情報も錯綜していたため、負傷者がどのくらいいるのかなど、把握するのに時間がかかった。こうして、救助活動は夜が明けるまで続いた。時間が経つにつれ、連絡が取れるようになると、召集をかけることが出来るようになり、徐々に消防団員の人数が増えていった。

原発が爆発したらしい

翌朝12日8時。この頃は誰も、福島第一原子力発電所の事故のことは頭になかった。人数も増え

てきた小高区の消防団は、この朝も1班から13班に分かれ各チームに分かれて捜索を行った。救助に加え遺体搬送の作業も入り、団員の負担も増えた。自分も捜索本部の一角で、団長や副団長、警察の方と捜索の作戦を練っていた。そして…その情報は警察無線より突然入ってきた。一緒に打ち合わせしていた警察官が「原発が爆発したらしい」と小声で言った。誰もが一瞬にして止まり「え？ なに?!」と振り向いた。

「原発が爆発した」という情報に、警察官も消防団幹部も「消防団の捜索隊も一時退避したほうがいい」となり、外で捜索している団員や隊員に、すぐさま「一時捜索をやめて車に待避せよ」と無線で連絡をし、30分程度車内に待機させた。その後、なんとそれは「誤報」という修正情報が入って来たのだった。が…それこそが誤報であり、実際には、原子力発電所で水素爆発が起っていたのだった。あの時、現場はかなりの情報が錯綜し混乱をきたしていた。昨晚からの夜通しの活動ということもあり、消防団の疲労も考慮したうえで、12日は15時くらいに捜索が打ち切られた。

同日の夕方、原子力発電所で原発事故が起っていることが明らかになり、区役所に緊急対策室が設けられた。緊急対策本部では、原子力発電所の事故を受け、明日からの捜索をどうするかが話し合われた。第一に上がったのは「原発事故を踏まえ、20km圏以内で活動する消防団の放射能対策はどうするか」ということだった。消防団の装備としても防護服が2、3着という少ない数で、マスクだけで対応せざるを得ないのが現状だった。18時25分には原子力発電所から半径20km圏内の住民には避難指示が出され、小高区もその圏内に入っていた。消防団の捜索も困難を極め、住民から「遺体がある」と通報があっても屋内退避や避難指示が出ている地域で、マスクだけでは対応するのは危険を伴うため団長も「いけ」と指示を出せずに悩んでいた。しかし、私たちは各自で判断し有志という形で動くことを決意した。他の団員には強制せず、自ら防護服を身にまとい、捜索を続けた。原子力発電所で働いている団員もいたた

め、放射線の知識に関するレクチャーも受けた。

搜索の断念と無念…そして再開

小高区では12日に避難指示が発令された。13日には消防団のローラー作戦による「避難指示」の広報活動が行われた。この地域の住民の方々には原子力発電所について非常にナーバスになっており、広報活動、誘導活動は早期にスムーズに行われた。大部分の区民は、市が用意したバスで18日から20日にかけて集団避難をした。有志で搜索に当たっていた消防団も、家族の意見もあり避難せざるを得なくなった。14日午前中に、小高区は事実上地域全域の閉鎖となった。

消防団の事務局は原町区に移したが、搜索は一時休止となってしまった。14日以降、小高区の消防団は避難所で、避難民への食事の準備などに従事した。私の家族も会津へと避難したが、私は南相馬に残り、消防団の活動を継続した。来る日も来る日も避難所でお世話をした。消防団も精神的疲労が積み重なってきていた。

そんな中、福島第一原子力発電所で3回目の爆発が起こったと情報が流れてきた。当時を振り返ると、「さすがにもうこれで駄目だ」と思い、あの時は疲労と重なり、本当に心が折れた。その爆発をきっかけに、残っていた団員と話し合い、活動を一時休止しようということになり、有志の消防団員たちも一旦それぞれの避難所に戻った。

4月8日、小高区に朗報がもたらされた。原子力発電所は不安定ながらも落ち着きだしたため、再び救助・搜索活動が再開できるとの話であった。消防団を徐々に招集し始め、最初の頃は私を含め3名だった。防護服を着て積載車で瓦礫のなかを搜索し、小高区の建設業者に頼み、大きな瓦礫などを重機で取り除きながら、遺体搜索にあたった。時間が経ち過ぎてしまった遺体は、色が変わっているため、瓦礫と間違わないように搜索するのに苦労した。まだ海水が深々と残る地域にはなかなか入れず手つかずだったが、排水ポンプ車



防護服を着て活動を再開

などを導入し、排水しながらの搜索を行った。

家族に心配されながらも、職務をまっとうすべく、最後まで小高区の搜索を諦めなかった。南相馬市では消防団の設備もしっかりしていた。救助活動は、これらの設備があってこそ発揮できる。消防団の活動は危険を伴うと思われがちだが、危険を回避するための装備を揃えたうえで活動できれば、よりよい活動が出来ると思う。

この災害により、小高区の住宅被害は全3,771世帯中、全壊317世帯、大規模半壊33世帯、半壊65世帯、床下浸水48世帯にも及んだ。

多くの人に助けられながら気概を持って

私は今回多くの関係者の方に助けられたことを感じている。この地震、津波を受け、海に面した我々の地域は、津波に対する意識がもっと必要ではないだろうかと思う。一旦避難しても、「大丈夫だ」と言って戻ってしまい、津波にあわれて亡くなった方も少なくない。また、道路の作りも、山の方へ逃げる道が少なく、海岸と並行に走っているため、波から逃げ切れず、車ごと津波に飲まれた方もいた。今回のような未曾有の災害をいつまでも忘れず、心に戒めることが肝要である。

私は自衛隊出身で災害派遣も何度も経験した。人一倍責任を強く感じ気概をもって消防団の職務に従事している。それが自分の誇りである。そして、私は今も南相馬の地で、放射線量計ガイガーカウンターを片手に持ちながら、消防団活動にあっている。

あの日から一歩も他には 行かないと決心した

福島県南相馬市消防団
原町区団 副団長

山見 重信 (62歳)
消防団歴 27年 (会社役員)



南相馬市原町区の概要

福島県南相馬市の原町区はその南相馬市中央に位置し、面積は198.49km²、人口4万7,050人（平成23年6月1日現在）で、南相馬市の玄関口として位置し、市役所も置かれている地域である。また、国の重要無形民俗文化財に指定されている相馬野馬追も、原町区にある雲雀ヶ原祭場地をメイン会場で行われている。

外の風景は一変していた

福島県南相馬市は震災や津波だけではなく原発事故という、まさに二重苦三重苦に苦しむ町だった。私は、あの日から一歩も他には行かないと決



南相馬市内の被災状況

心した。

震災の当日も普段通りに、地元のコンクリート二次製品製造会社で働いていた。14時46分に大きな揺れが東北を襲った。

その揺れは、立てかけていた鉄筋の素材を倒し、人が立っていることがやっという揺れだった。私はすぐにブレーカーを落としに行き、仲間と材料などが倒れないように押さえていたが、あまりにも長い揺れだったため、「これはかなりヤバイ」と思い仲間と共に外へ出た。揺れは5、6分でおさまったが、外の風景は一変していた。ピラミッド型に積んであった製品が崩れ落ち、会社の出入口が塞がれた状態で製品が散乱したひどい状況だった。

揺れがおさまらずに家族のことが心配になり、連絡を取ろうと携帯電話を手を取ったが不通となっていた。余震の続くなか、出入り口に散乱している瓦礫をリフトでどかして取り除き、出口をなんとか確保した。社長の判断でその日は家に戻ろうということになり、私は車で自宅に向かった。南相馬市ではこの時、真ん中にある原町区の本町と三島町で震度5弱を観測した。

私の自宅は福島第一原子力発電所より20km圏区域のすぐ近くで、今も家の目の前には警戒区域を示す「立ち入り禁止区域」のバリケードがある。震災当日、周りの道路の状況を確認しながら旧国道を南に向った。途中の風景を見て「あの揺れにしては被害がそれ程でもない」とその時は思っ

いた。自宅に戻ると家の入口脇にある土蔵が崩れていたが、自宅や家族は無事で安堵したのを覚えている。だが発災から約50分、自分が家に着いたその頃、津波の第1波が南相馬市の海辺を襲っていた。家で被害状況を確認していた時、防災行政無線により初めて津波が襲来していることを知った。私はすぐに消防団の半被を身に付け、被害にあっている現場に向かうことにした。



かつての住宅街の被災状況

水没した町で必至の救助

原町区の南警察署の先、上洪佐という場所はすでに津波の被害で水没しており、進入禁止となっていた。その進入禁止のすぐ先には、息子の嫁さんの実家があった。私が実家に駆け付けた時、目の前に見えるその実家は1階部分に津波による水没した跡があり、かろうじて建っている状態だった。

私はなにか嫌な胸騒ぎに苛まれた。行く手を阻むかのように電柱や木がなぎ倒され、水没していた。だが感じる嫌な胸騒ぎに押され、いてもたってもいられなくなり、その家に向かった。消防士が「山見副団長！ それ以上は入っちゃダメだよ！ 危ないから！」の呼びかけがあったが躊躇せず、腰まである水位のなかを進んで行った。家に近づくにつれ、自分の胸騒ぎは益々膨らんでいき、「実家にまだ人がいるのではないか」「確認しなければ…」と思った。瓦礫が行く手を遮ったが、かろうじて人が通れるスペースがあり、私はなんとかその家に着いた。倒れかけて低くなっている1階の屋根から2階に上がり、大声で「誰かいんのかっ！」「山見だっ！」と叫んだ。

ふと辺りを見ると他の家の屋根に嫁さんのお母さんとおばあさんが寄り添っているのが見えた。急いでその屋根に向かうとおばあさんは意識朦朧とし、震えている状態だった。おばあさんは、津波がきた際に車で逃げようとし、車ごと流されてしまったが、運よく車を見つけたお母さんに助け出され、屋根の上に避難したのだという。屋根に

登ってくると、お母さんが「山見のお父さんがきてくれたよ！」と、おばあちゃんに声をかけた。自分の半被をおばあちゃんにかけて「大丈夫だから！ 大丈夫だから！」と何回も声をかけ、消防士に向かい、大きな声で「2人いたよ」と安否を知らせた。すぐに消防士たちが担架を持ってきた。私は2人を乗せた救急車を見送った。

その後、私は家に戻って、お嫁さんに家族の状況を報告した。その足で市役所に設置された災害対策本部に合流した。発災当日11日の段階で、団員はかろうじて4名集まった。災害が起きたばかりで家族や家のことで混乱を極めており、消防団の招集は翌朝にすることになった。

90名以上の団員が戻ってきた

翌12日朝、福島第一原子力発電所で原発事故が発生した。私は朝から警察や消防と捜索の打ち合わせをするため市役所にいた。南相馬市内は通信網がまだ遮断されている所もあり、団員の召集も難しく、連絡をどう取るかなども話し合われた。一方、各団員も震災や津波で被害にあい混乱していたものの家族の安否確認や被害確認を行ったのち、消防団員としての責務を果たすため、連絡できる団員は状況報告として市役所に連絡を入れていた。

南相馬市では原子力発電所の事故により、内閣総理大臣から市の南部地区（主として小高区、原子力発電所から20km以内）に避難指示が発令され



上渋沢の実家付近の被災状況

た。南相馬市では小高区全体がその半径20km圏内にかかり、小高区だけでも約9,600人が県外へ避難した（平成23年7月現在）原町区の私の所は、かろうじて避難区域にかからなかったものの原子力発電所事故の影響がないということではなかった。自分の息子夫婦は、子どもが小さいということもあり一時市外へと避難した。

15日には「屋内退避勧告」が出され、捜索にも影響が出て、困難を極めた。団長は屋内退避勧告が出た以上、団員たちに強制で「団員を集め、捜索せよ」とは言えず、団員たちの安全も考慮しなければならなくなり、やむをえず捜索を断念することを判断した。

しかし、団長の思いとは裏腹に各団員たちはこの非常時に責務を果たしたいという思いで集まり始めた。1人増え、2人増えというように徐々に集まり、最終的には90名以上の団員が戻ってきた。団員たちの気概が本当に嬉しかったし、感謝したい気持ちで一杯だった。私や団長はその団員たちの思いに応えるべく、団員たちに出来るだけ安全を確保しながら捜索してほしいという思いで事務局にマスクや作業着、捜索道具などの用意をお願いした。福島県消防協会もすぐに対応し、作業着や捜索用具などを支給してくれた。なかには震災で家や洋服なども失った団員たちもいたが、彼らも支給された作業着を着ながら、捜索に従事してくれた。

無念さに涙があふれ出た

本格的に始まった捜索や遺体捜索の作業のなか、私は遺体安置所で活動することになった。警察官の立ち合いのなか、ご遺体を引き継ぐ場合は、「何時」「何処で（詳しい場所）」「誰が発見して」「状況」などを記載することになっており、全国から集まっている警察官では詳しい地名などは分からず、地元の人間のほうがスムーズに引き継げるので、その任務に自ら付き陣頭指揮にあたった。

私はご遺体の無念さに心を痛めながらも、せめてご遺体を安置する前に、「汚れた体をきれいにしたい」という思いから、ご遺体の無念を振り払うかのように丁寧に洗う仕事を来る日も来る日も続けた。日が経つにつれて1日10体も20体も上がってくるご遺体で、作業が追い付かなくなった時もあった。私は学校のプールの水をポンプで吸い上げ大量の水を確保。ご遺体がこれ以上傷つかないようにとホースからの水流を噴霧状にして丁寧に洗い、着ていた衣類も洗ってから袋に入れ、ご遺体と一緒に安置をした。こうして私は3月いっぱい284体のご遺体を送った。

なかには災害の惨さを物語るご遺体もあり、若い団員にはなるべくそのようなご遺体を見せず、自分が行った。また時には、小さな子供のご遺体上がることもあった。その子はまだ幼く生まれた時のように腕と足を曲げ、その眠ったような安らかな姿を見た時はその子の無念さに自然と涙があふれ出た。

他の現場でもご遺体上がりはじめ、私はその地区の消防団にご遺体の取扱などの指導を行った。

何よりのご馳走、身も心も温まった

4月に入ると私は、捜索で指揮をとった。消防・警察・自衛隊・消防団の合同で捜索隊の分団を作り、必ず各分団には土地勘のある詳しい人間

が入り捜索をすることとなった。団員たちにはまず「自分たちの身は自分たちでしっかり守る」を合言葉にマスク、手袋、軍手などを揃え二次災害がでないように徹底し、捜索に臨むよう伝えた。南相馬市の当時の捜索現状は、原子力発電所の事故の影響で、行動制限が出てしまったが、団員たちは「少しでも早くご遺体をご家族の元へ」という気持ちで懸命に捜索を行った。南相馬市消防団は消防団波の無線の数が充実しており、各分団が状況を常に把握できることができ捜索においても十分力を発揮した。

また南相馬市では原子力発電所事故の風評被害も激しく、流通が遮断され物資が届かなくなっていた。捜索にあって食事もろくに摂れない状況がつづいた。しかし、誰ひとり文句を言う者もなく捜索を行っていた。時には温かいお茶を喉に通すだけの時もあった。

そのような状況のなかで、炊き出しによる熱いカレーライスが出された時の団員の笑顔、それを食べて「何よりのご馳走」と思ったことは、今でも忘れられない。その一杯で身も心も温まり、活動への意欲を取りかえした。

水の流れを把握して、防災に役立てる

今回の津波で、南相馬市消防団では死者8名、行方不明者1名という尊い犠牲がでている。殉職者のなかには、消防車で市民へ津波の避難広報を呼びかけている最中に、波にのまれた団員もい



海岸付近の様子



地形によって海水の流れは予測できる

る。東日本大震災という未曾有の大災害は色々な教訓を残した。

海辺の町に住む住民の方々を襲った津波は、「まさかそんな大きな津波がくるとは」という考えにより引き起こされたのではないだろうか。また、津波で起こる海水の流れを地形の分析から予測することも不可能ではなく、水の流れを把握すればそれを今後の防災に役立てることもできるのではないかと、私は思う。今回の津波は白い波ではなく、瓦礫を含んだ黒い泥水の波として襲ってきた。多くの犠牲者は、この黒い津波で命を失った。

復興に向けて前向きにここに残る

南相馬市には今もまだ避難をしている地域が多く空家が多いため、消防団は毎晩交替で巡回を行い防犯に尽くしている。消防団の基本的役割とは、消火活動、鎮火後の現場残務処理など、常備消防のサポートであると思っているが、最近では地域に密着した存在として犯罪を未然に防ぐ自警団の役割もかなり多くなっているといえる。

若い方は将来があるので原発事故後は心配で避難されてる方も多いが、私たち夫婦はあの震災以降、ここに残ることを決めた。復興に向けて前向きな姿勢で半歩でもいいから前進したいと思う。